

ひたすら前へ—



No.795

10月号の主な掲載記事

- ☑特集「涌谷高等学校美術部」…………… P. 2
- ☑第1回大崎地区中体連駅伝競走大会
 フォトレポート…………… P. 8
- ☑新型コロナウイルス対策事業…………… P. 16

— 特集 —

描かれる異彩

涌谷高等学校美術部

令和3年度宮城県公立高等学校入学者
選抜で、出願倍率が0・96倍と初めて1
倍を割り込みました。特に郡部で定員割
れが多く、大崎管内でも深刻です。

そういった中で、涌谷高等学校では、
美術部が令和元年以降3年連続で全国高

等学校総合文化祭に出品を果たした他、
宮城県高等学校美術展で、2年連続で県
内最多受賞という成績を残しています。

その成果により「美術を学びたい」と
いう中学生からの注目を集め始めている
涌谷高校美術部の輝きに迫ります。





第2期黄金期

描かれる異彩は

偉才ではなく努力の結晶

浦谷高等学校の美術部は、夏の風物詩「伊達かつぱの里まつり」でのフェイスペインティングボランティアなど、町民の皆さんにも馴染み深い存在です。

一方で、浦谷高校の正門付近に掲げられている横断幕をはじめ、県内だけではなく全国の美術展の受賞者を多数輩出しています。

この華々しい実績は、長年続いてきたわけではありません。1980年代から1990年代にかけて県内の美術展で最多受賞を誇り、最初の黄金期を迎えましたが、2000年代に入ると一時低迷。平成20年に全国高等学校総合文化祭への出品を境に、平成30年までの10年間、大きな成果をあげてこれませんでした。転機を迎えたのは、平成31年の春。現美術部顧問の藤原

和矩教諭の赴任をきっかけに部員が奮起し、第2期黄金期を迎えることになりました。

間違った自由からの脱却で得た成果

藤原教諭が赴任する以前は、美術部は待ち合わせのための時間つぶしの場所、たまり場になっていた第二美術室は閉鎖されているような状況でした。

私自身がかかわるのであれば、中途半端なかかわり方はしたくない。ただ、顧問の考えを一方的に押し付けるのも違うと、赴任して2日目に、当時の部長たちとこれからどうしていきたいかについて、話し合いを持ちました。

話し合いの場で、「一つの作品でも胸を張って発表できるようにになりたいなら、しっかりと教える」という問いに、



浦谷高等学校美術部顧問
藤原 和矩 教諭

当時の部長たちは「やりたいです」と即答しました。

それまでは、部員が自由に好きなものを描く方針でしたが、それは自由のはき違いで、一定以上の知識と技術がなければ自由に描けるものではありません。

6月に開催される地区展に向けて、作品の一連の作り方や審査員の評価ポイントなどを部員ときちんと向き合い、押し付けにならないように、添え木のような二人三脚のバランスで指導を行い、部員たちは苦勞して作品を完成させました。その作品に対し「自分たちの絵を一番いいところに飾りたい」と発言したのを聞き、部員たちの創作に対する気持ち切り替わったことを実感しました。

ここ数年で、浦谷高校美術部は、数々の賞を受賞してい



①

ますが、賞をとって当たり前ではなく、部員たちには突出した才能があるわけでもありません。

作品制作は、個人プレーではなく、部員同士が互いに教え合い、違った視点や創作にかける熱を与え合うような部の環境づくりをしています。部員たちは、仲間が頑張っているから自分も頑張ろう、そして、自らの限界の殻を破ろうと、みんなでもがき合い、時間をかけて作品を生み出しています。部員たちは本当によくやっています。

《写真解説》①伊達かつぱの里まつりに出店する浦谷高校美術部②350年遠忌に合わせて描かれた伊達安宗重公の大鳳③美術の基本テクニックを指導し部員の能力を引き出す④2019さが総文の出品された作品。魚の集合体を紙粘土で表現



④



③



②

紡がれた黄金期

～先輩から後輩へつなぐ伝統「思いと技術」～

第2期黄金期に入り、4年目の涌谷高校美術部。この黄金期を一過性のものとせず、確固たる伝統とするため、涌谷高校美術部としての「思いと技術」が着実に受け継がれています。

これまでの4年間、歴代の部員たちが、どのように携わってきたのかを紹介します。

くすぶるやる気に灯った火

赴任してきた藤原先生に最初言われたのは、「やる気があるのか、ないのか」という言葉でした。元々美術をやりたい意志を持ち在籍していた私たちがでしたが、2年生までやりたいことをなんとなくやっていく状況でした。

そこに藤原先生からの言葉があり、ちゃんとアトらしいことをやりたいという気持ちに火がつかまりました。

私自身は、美術系大学への進学を希望していたため、デッサン用の鉛筆の削り方や水彩画でも色彩に深みを出すための下地の作り方など、美術の基礎中の基礎をたたき込んでもらいました。3年生の1年間という限られた時間での学びでしたが、その体験によって意欲がわき、自ら必要な知識と技術を調べるように



平成30年度涌谷高校卒業生
金子 菜々 さん

なり、さまざまな視点から美術を楽しめるようになっていきました。そして、自分の作品を、どこに出しても恥ずかしくないという自信を持てるようになりました。

私たちは今の美術部の土台の土台くらいしか築けていません。後輩たちに恵まれ、藤原先生の指導があったことで、今があります。

中途半端な気持ちではなく、力を身に付けたいという人にとって良い環境が涌谷高校美術部にはあります。



3年生の時の作品。故郷の活性化と北浦梨のPRを表現。東北芸術工科大学に進学し、地方の自治体が抱える課題を解決する「コト」のデザインを、地域に飛び込み、フィールドワークを通して研究中。

美術の沼にはまった3年間

入部当初は、美術に興味がなく、楽しそうだから入部したというのが、正直なところ。その1年生の時に、藤原先生と当時の3年生だった金子先輩たちを中心に美術部は変化していききました。

先輩が習得した知識と技術を後輩に還元していくというのが、藤原先生が提唱するチームプレーです。藤原先生が赴任して2年目くらいから部活内でのチームプレーが成熟していききました。顧問は部員に技法やアイデアを教え、創作上の困り事は、先輩が後輩に実技を示すなどし、相談相手になりました。また、先輩が先輩に相談しやすい美術部の雰囲気づくりに努めました。

3年生の時には部長として後輩の技術指導に携わりまし

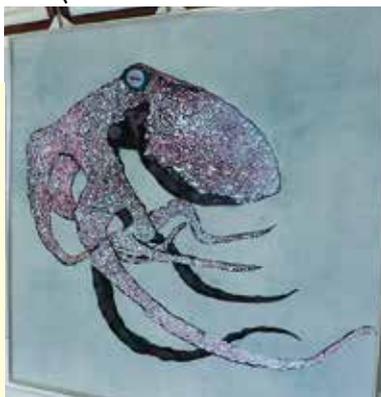


令和2年度涌谷高校卒業生
千田 唱 さん

た。苦勞よりも、教えた分だけうまくなる後輩の姿に楽しさしかありませんでした。

その涌谷高校のスタイルが着実に結果にもつながっていききました。それまで宮城県内では、美術科がある宮城野高校と東北生活文化大学高校の2強でしたが、涌谷高校がコングールの受賞数で上回るようになっていきました。

その実績もあり、今の2年生には、美術を学ぶために涌谷高校を志望したという部員も現れ始めました。まさに時代が変わった瞬間です。



3年生の時の作品。藤原先生直伝のシルクスクリーンの技法で創作し、全国高等学校総合文化祭に宮城県代表として出品。現在、自分自身を成長させてくれた藤原先生の影響で、美術科の教員を目指し、東北芸術工科大学に進学。



真剣に作品に向かいつつも
柔らかな雰囲気
に満ちた創作現場。

③



①



②

《写真解説》①藤原先生が収集し掲示する美術部栄光の記録②黄金期初代部長の宮城県高等学校美術展ポスター部門の最終選考2作品に残った作品③日常の創作風景④部員の適性に合わせた創作⑤部員同士で互いに高め合う



⑤



④

各自が壁側に向かって作品を作り、他の部員がどのような作品を作っているのか、お互いに確認しながら、参考にしたり、アドバイスできるような環境にしています。
先輩の技法とその結晶の作



令和3年に、高校生国際美術展に出品され、奨励賞を受賞した作品。色付けした石こうを重ね塗りしたもの研磨し、その上に、マンボウの陰影を点描して仕上げられています。さまざまな技法を組み合わせて、まどろむマンボウの姿が立体的に表現されています。

誇りを持ち、つなぐ伝統
入学直後の部活動紹介で、先輩の絵画や立体などの作品を見て、一生懸命作品に向き合っている先輩たちと出会い、元々絵を描くことが好きだったこともあり、改めて私も美術に挑戦してみたいと思い、入部を決意しました。



令和3年度美術部部長
かなざわ あんず
金澤 杏 さん

品を先輩に着実に受け継いでいき、ノウハウとして蓄積される仕組みが、涌谷高校の美術部の伝統となっています。
先輩たちは誇りを持ち、伝統をつなぎ、県内トップの実績を挙げてきました。私自身部長として、先輩がつないできたことを、後輩にもつなげられるか重圧を感じています。しかし、後輩たちにも、受賞数にこだわり、どこに出しても恥ずかしくない作品を創作してもらい、涌谷高校美術部が、これからもトップであり続けてほしいと願っています。



普通の立体はおもしろくない
 紀の国わかやま2021総文美術・工芸部門に宮城県代表で出品された立体造形。使わなくなった筆やペンキのふた、絵の具のチューブなどの美術部ではお馴染みの廃材を、総数がわからないほどふんだんに使用した作品です。
 幼い頃からのSL好きだからこそ成せた、おもちゃにはない本物に近い細部の作り込みが評価されました。



涌谷高校美術部3年生
 高橋 跳人さん



涌谷高校美術部 ギャラリー Art Club Gallery



涌谷高校美術部の部員の皆さんが、どのような作品を創作しているのか、その一部を紹介します。

水彩画をはじめとして、立体造形や貼り絵など、いずれの作品も企画構想から完成までに数カ月を要し、創意工夫と情熱を込めて作り上げられています。



涌谷高校美術部2年生
 齋藤 大翔さん

掛け算の創作・水彩×貼り絵
 はじめは水彩画に取り組んでいましたが、私の適性を踏まえて、藤原先生から貼り絵を勧められ、創作技法を転向しました。
 貼り絵をする際には、単色を貼るのではなく、画用紙に絵の具を塗り重ね、その紙を貼りつけていくことで、変化のある色彩を表現するようにしています。
 今回の作品は、貼り絵でサギを表現し、宮城県愛鳥週間ポスター原画コンクールで、優秀賞を受賞しました。



やるならとことん上を目指す
 入学当初、先輩の熱量の大きさを感じ、美術部に入部しました。
 主に水彩アクリル画に取り組んでいます。やるからには上を目指したいので、創作には可能な限り時間を費やしています。土曜日・日曜日はもちろん、平日の朝も早めに登校して、作品に向き合っています。
 この作品は、カエルと人物が主人公なので、どちらも目立たせられるよう、注力しました。



涌谷高校美術部2年生
 岸浪 野々香さん



涌谷高校美術部1年生
 斑目 春菜さん

志望した美術部で最初の創作
 中学校でも美術部で、涌谷高校の美術部に入りたくて、涌谷高校を目指しました。先輩のように展示される絵を描くことを目標にしています。
 宮城水彩展に向けて高校生になって初めての作品を描きました。人物の肌を表現するための色の重ね塗りの技法など、初めての経験が多く大変でしたが、先輩の助けもあり、完成させられました。
 今後、経験を積んでいき、誰もが驚くような作品を作りたいです。





②



③



①

創り上げる輝かしい作品と実績が、美術部の誇りとなり、涌谷高校の特色へ。

涌谷高校の特色の核に

私が涌谷高校に赴任してきた5年前は、美術というよりもイラストを描くことがメインだったという印象でしたが、顧問の藤原先生の赴任をきっかけに、ある意味で運動部よりも厳しい指導の下、自ら美術を学びたいという意志が高めながら取り組み、活躍するようになってきました。

宮城県内の高校は、少子化に加えて、私学や仙台市内の公立高校に志望者が集中している状況で、郡部は定員割れが深刻です。

涌谷高校は、大崎地区において、普通科で美術・音楽・書道の芸術三科のある高校として、芸術教育を通して人間教育を行うことを特色としてまいりました。現在、生徒数が少ない中で、美術部だけではなく、書道部からも全国高



涌谷高等学校校長
樋野 伸治 校長

等学校総合文化祭へ出場する生徒がいたり、また、茶華道部からも池坊「学校華道インターネット花展」の全国大会に出場するなど、芸術分野の生徒たちの活躍には目覚ましいものがあり、運動部への波及効果も期待しています。

これまでは宮城県で美術を学ぶなら美術科のある宮城野高校に目が行きがちでしたが、近年、涌谷高校が宮城野高校を上回る実績をあげており、涌谷高校でも美術を学べるという認識が、近隣で美術を志したい中学生たちに広まりつつあります。

少子化・定員割れが深刻な郡部で、芸術三科のある涌谷高校として、今後、涌谷高校が生き残っていくため、さらに一歩踏み込んだ特色づけの道筋を立てられればと考えているところです。

《写真解説》①②高校生国際美術展で奨励賞を受賞した高橋瑞穂さん(2年生)の作品。木材を組み合わせたキャンパスも作品の一部になっている。独創的な作品③令和2年春にコロナ禍で喘ぐ美術部員たちに達成感をと樋野校長発案で実施されたウォールアート。この作品を地域の皆さんが見学に訪れています。



涌谷高等学校の
次の100年を紡ぐ
希望の光

創立100周年を迎えた涌谷高校で、この4年間の美術部の実績を文化・伝統と呼ぶには、早いと感じる人もいるかもしれません。

しかし、美術を学びたいという意志を持った部員たちと顧問が一から築き上げてきた実績は、これまでの涌谷高校100年の歴史と比べても、劣らぬ輝きを放っています。今後も少子化による定員割れが深刻化することで、県立高校の再編・統合が検討される可能性があります。

そういった中で、実績を伴いながら、学びたいニーズに合った特色を打ち出していくことは、生き残りだけではなく、次の100年の歴史を発展的に紡ぐ希望の光になるのではないのでしょうか。

新たな涌谷高校の特色が、涌谷高校美術部によって描き出されています。

涌谷中学校が遠田郡でアベック優勝 第1回大崎地区中体連駅伝競走大会



仲間が待つゴールへ 心でたすきをつなぐ

9月1日(水)に、利府町にある宮城県総合運動公園宮城スタジアムにおいて、第1回大崎地区中体連駅伝競走大会が開催されました。

今年度の駅伝地区大会は大崎市と遠田郡での合同開催となりました。大崎市の優勝チーム・準優勝チームと遠田郡の優勝チームが県大会へ出場します。

また、今大会は、新型コロナウイルスの感染拡大を防止するため、たすきリレーを行わず、スタジアム内のトラックを周回し(女子5区間12km・男子6区間18km)、その合計タイムで競い合いました。

涌谷中学校からは、女子2チーム、男子2チームが出場。小雨が断続的に降りながらも、長距離走には適した気候で、コロナ禍の制限された練習機会でも着実に積み上げて来た実力を発揮しました。

各選手とも徹底して自分のペースを守り、レース序盤にハイペースとなる先頭集団に無理に着いていくことなく温存。好機を伺い、後半にスタミナが切れて先頭集団から落

ちてくる他校の選手を次々に追い抜き去り、上位へと進出する姿は、圧巻でした。

その戦略が功を奏し、涌谷中学校の多くの選手が自己ベストタイムを更新しました。

競技結果は、女子の部では全21チーム中、Aチームが4位(遠田郡1位)、Bチームが9位(遠田郡3位)。男子の部では全29チーム中、Aチームが6位(遠田郡1位)、Bチームが13位(遠田郡4位)となり、平成29年以來の遠田郡アベック優勝を果たしました。なお、女子Aチームは、全選手が遠田郡で区間賞でした。

女子Aチームと男子Aチームは、令和3年10月6日(水)に栗原市で開催予定の宮城県大会に出場します。

《写真解説》

①チームメイト同士ペースを刻む ②一つでも上の順位へラストスパート ③スタート前に漂う緊張感 ④ゴールとともに安堵の表情 ⑤⑥後続を率いながら上位を伺う ⑦スタートとともに思い思いの位置へと飛び出す選手たち ⑧⑨⑩闘志がみなぎる表情で激しく競り合う選手たち